

中学生および青少年による地域活動のあり方に関する提言

～人と人がつながりあったぬくもりある壬生町のために～

提言書

平成27年3月

壬生町社会教育委員の会議

目次

1	はじめに	1
2	今日的な課題	2
3	提言	4
	提言1 子どもと大人がつながる地域活動を推進します。	4
	(1) 子どもと大人が一体となって楽しめる行事や活動を推進します。	4
	(2) 「食」の魅力を活用して人と人とを結びます。	5
	(3) 子どもと大人が一番身近につながれる自治会の機能を活用します。	6
	提言2 大人がつながる心地よさを感じ取れる地域活動を推進します。	7
	(1) 大人が「楽しい」と思えるような集まりを意図的に設けます。	7
	(2) 孤独にさせないあたたかな地域を醸成します。	7
	(3) 柔軟に自治会の機能を活用し、大人のつながりを創出します。	8
	提言3 人と人がつながる地域活動になるため、町民活動支援センター（愛称：“みぶりん”）を活用します。	9
	(1) “みぶりん”が、中学生や青少年による地域活動とそれにかかわる地域の大人たちの架け橋となります。 ...	9
	(2) 町民活動支援センターが、“わたしたちのみぶりん”になるようにします。	9
4	おわりに	11
5	壬生町社会教育委員の会議 名簿（平成25、26年度）	12

1 はじめに

壬生町では平成24年度から中学生による地域活動を、平成26年度から中学校卒業後の青少年による地域活動を推進してきており、地域住民との交流やふれあいを通して中学生や青少年たちは自己有用感を育んでいることが明らかになっています。このように、震災以降、人々が多様につながりあえる地域社会の創出が重視されて来ていますが、一方では、情報化社会の進展や個人生活重視などライフスタイルの変化により、他人とつながらなくても不便を感じていない人たちも少なからず存在しているのが現状です。

これからますます少子・高齢化が進み、防犯・防災等で人とのつながりが重要になっていきます。しかしながら、人とのつながりは、近所に住んでいるから自然に生まれるという訳ではありません。少し前のデータになりますが、平成19年版国民生活白書によりますと、近隣の住民と行き来する頻度は、「よく行き来している」「ある程度行き来している」と回答している人が約4割、「ほとんど行き来していない」「あてはまる人がいない」と回答している人が約4割と報告されています。このことから、ゆるやかな人とのつながりを生み出すためには、まずは地域での活動に参加し、人とふれあう機会を得ることが必要になってくるのがわかります。

現在、教育委員会でコーディネートしている中学生と青少年による地域活動は、町や教育委員会が主催共催で行われている行事等に限って行って、ある一つの目的を達成するために集まった人たちとの間で、確実につながりが生まれています。参加した中学生や青少年たちから寄せられた感想によると、地域のあたたかさに支えられている自分を実感でき、人とのふれあいやつながりの心地よさを味わうことができています。また、中学生と青少年による地域活動は、地域活動に中学生や青少年が参加することで、彼らが核となり、地域の大人どうしの交流やつながりが創出されることもねらいとしています。この取り組みで得られた心地よい感情がきっかけとなり、参加した中学生、青少年、そしてかかわった大人たちが、自分の居住する地域においても人とのつながり“地縁”を大切にしながら、世代をこえたより多くの地域住民が一体となった、ぬくもりあるまちづくりを推進していってくれることが期待されます。

以上のような観点から、壬生町社会教育委員の会議では、中学生および青少年による地域活動が、人と人がつながりあったぬくもりある壬生町を担う人づくりの場となれることを願い、提言をまとめさせていただきました。

2 今日の課題

栃木県では、平成13年度から、学校・家庭・地域社会が一体となって、子どもたちに「生きる力」を育み、心豊かな青少年の育成を目指して、子ども同士、大人同士、子どもと大人、そして幅広い年代の人々が交流活動、体験活動、学習活動を「ふれあい活動」として、全県的に推進してきています。「地域の教育力が…」と言われるようになってから随分時は経ちますが、宇都宮大学教育学部教授の松本敏先生は「今ほど、地域の教育力が学校を支えている時代はない」と言っています。実際に、壬生町でも毎年500人以上の地域住民が学校の教育や子どもたちの安全等にかかわってくださり、地域の力が日々の子どもの学びや笑顔を支えています。学校の子どもたちと地域の大人たちは、よりよい関係を築き、幅広い年代の人たちが交流を深めています。

しかしながら、地域の子ども同士、地域の大人同士、地域の子どもと大人、そして幅広い年代の人々はどうでしょうか。「はじめに」でも記述しましたが、人とつながらなくても何の不便も感じない人が多く存在しているのが現状です。実際に、平成26年10月の壬生町における自治会加入世帯は、町内全世帯数15,209戸のうち11,188戸と集計されています。自治会に加入している世帯は全世帯の73.6%であり、秋田市81.2%（H25）、福井市79%（H25）、横浜市76.1%（H26）、札幌市70.5%（H26）、京都市69.8%（H24）、宇都宮市67.3%（H26）と比較しても決して高い状況とは言えません。平成26年度の下都賀地区ふれあい学習研修会において宇都宮大学教育学部教授の松本敏先生が講話の中でお話になっていたことですが、大阪大学大学院教授の志水宏吉研究室の調査によると、学力は親の収入が多いか少ないかという経済的な要因よりも、人間関係が濃密か希薄かという人と人とのつながりの方がより大きくに影響を受けるのだそうです。この格差を志水宏吉先生は、「つながり格差」と読んでいます。全国学力・学習状況調査において常に上位にランクされている秋田県及び福井県の県庁所在地での自治会加入率が高いという事実も、人と人との濃密なつながりがあった家庭や地域で学び、育った子どもたちは学力が高いということを裏付けているのかも知れません。学力の高さと自尊感情の高さは相関関係にあるといわれていますので、人と人とのつながりの濃密さは、子どもたちの自尊感情によい影響を与えているということも期待されます（AとBは相関関係にあり、AとCも相関関係にあるが、BとCは相関関係にないということもあるので今後調査をしていく必要がある）。人と人がつながりあったあたたかな地域において、幅広い年代の人々と交流をとおして子どもたちがのびのびと育つことができるような壬生町であるために、今、地域の幅広い年代の人々のつながり力が求められています。

全国的に、自治会の加入世帯率が低下している状況と比例して、育成会への加入世帯率も年々減少傾向にあり、地域の大人たちが一丸となって子どもたちの健全育成に携われないことが懸念されています。人とつながることに不便を感じない大人が多く存在するだけでなく、人とつながることに對して煩わしさを感じているような事例が生じていることも耳にしています。地域に住む人々が、協働で地域内の様々な課題解決や次代を担う子どもたちの育成に取り組み、親睦を図

りながら住みよいまちまちづくりを進めていくはずの自治会や育成会がうまく機能しなくなってしまった地域が存在し始めているのです。これまで自治会と育成会が協働で子どもたちを巻き込みながら行ってきたどんど焼きや地域での夏祭りが消滅したり、役員になりたくないから育成会に入らない家庭が増えて育成会そのものが存続できなくなってしまったりといった事例などです。人とつながらないですむ便利な世の中は、人とのつながりの中でしか味わえない心地よさを感じ取る必要のない世の中と隣り合わせであると言えます。個の集合体である地域や町が潤いのあるものとなるためには、個々がよりよい関係でつながり、地域住民とよりよい関係でつながった一人一人の心理的満足が不可欠な条件であると考えられます。このことから、人と人とのつながりの心地よさを感じ取ってもらえるよう、地域活動の機会の提供や環境の整備を進めていくことが課題となっていると考えられます。

平成 25 年に壬生町社会教育委員の会議で行った調査によりますと、平成 25 年度での「地域活動によく参加している」「どちらかといえば参加している」と回答している中学生の割合は 42.9% であり、平成 23 年度の調査と比較して 5.0 ポイント上昇していることが明らかになっています。この結果は、平成 24 年度から推進している中学生による地域活動が地域に出ているいろいろな人とかかわりながら活動するきっかけとなっているということが予想できます。また、壬生町社会教育委員の会議では、中学生と高校生の保護者を対象としても地域活動への参加状況について調査を行いました。その結果、少なくとも 1 回以上は何らかの地域活動に参加している中学生保護者が 7 割以上、高校生保護者が 6 割以上存在していることが分かりました。そのうち、積極的に参加している保護者は 5.9% であり、31.3% の保護者は「興味があり、協力可能な行事や活動だった」「自分の子どもや地域の人たちが喜ぶことができるから」を参加の理由にあげています。しかし、参加した保護者の 6 割は、「誘われたりお願いされたりしたから」「自治会や育成会の役員や当番だったから」など、自らの意志で参加したわけではないこと理由にあげています。平成 26 年度には、のべ 418 人の中学生と高校生が自らの意志で教育委員会の呼びかけに応じて地域活動に参加しています。中学生がそうであるように、地域の大人たちが自らの意志で地域に出て、さまざまな世代の人たちと交流をはかれるようにすることや、自らの意志で地域活動に出てきたわけではない大人たちに、人とかかわることの心地よさや子どもたちの笑顔のために活動するうれしさを感じ取ってもらえるよう、大人たちの地域活動を推進していくことが、人と人がつながりあったぬくもりある壬生町を創るために必要であると考えられます。

以上のような地域における人と人とのつながりが弱まっている状況を改善していくためにも、現在推進している中学生および青少年による地域活動を核として、小さな子から高齢者までが笑顔でつながり合えるよさやそのためにできることを地域に発信していくことが課題となります。

「ふれあい学習」が学校と地域をつないだように、壬生町の幅広い年代の人たちが心地よくつながれるために、行政ができること、地域の大人ができること、そして次代を担う子どもたちにできることについて具体的な方策を示す必要があると考えます。

3 提言

先述の課題を受けて、これからの壬生町が、人と人がつながりあったぬくもりのある町であり続けるために、中学生や青少年による地域活動とそれにかかわる地域の大人たちがどうあるべきかについて、以下のとおり提言します。なお、それぞれの提言に対し、「行政」、「地域の大人」、そして、中学生や青少年を含めた「次代を担う子どもたち」という3つの視点から、具体的な方策を示しました。

提言1 子どもと大人がつながる地域活動を推進します。

(1) 子どもと大人が一体となって楽しめる行事や活動を推進します。

[行政]

- ア 中学生および青少年が参画する地域活動において、子どもと大人と一緒に遊べるコーナーを設け、中学生と青少年に内容を考えてもらい、運営できる機会を整備します。
- イ 中学生および青少年による地域活動（ボランティアスタッフとして参加する内容）において、中学生や青少年とともに活動する大人の参加も呼びかけます。
- ウ 単位育成会長研修会において、人と人のふれあいを重視したレクリエーションの事例を紹介し、地域住民が一体となって心豊かな子どもを育てるような育成会行事の開催を推奨します。

[地域の大人]

- ア 「子どもだけ」、「大人だけ」ではできないイベントを企画し、意図的に幅広い年代の人たちが交流できる機会を創出します。
- イ 上記のイベントを企画する際、大人がコーディネーター役となり、中学生や青少年のアイデアを取り入れるなど、企画から運営まで幅広い年代の人たちがかわれるようにします。
- ウ 子どもが参加する地域の行事やボランティア活動などに積極的に参加し、多くの子どもたちとの会話やふれあいを楽しみます。
- エ 子どもたちと一緒に活動する中で、よい行いをした子を見かけたら大いに賞賛し、子どもたちの自尊感情・自己肯定感を育むよう心がけます。

[次代を担う子どもたち]

- ア 中学生および青少年は、自分がアイデアを出し、運営できるような地域の行事があれば進んで参加し、地域の小さな子から高齢者までが楽しく参加できるような内容を、運営する大人の方たちと一緒に企画・実行します。

- イ 中学生や青少年は、町等が行う大きなイベント型地域活動にボランティアとして参加するだけでなく、自治会や育成会が行う活動や行事にも進んで参加し、身近な地域の大人たちとふれあい、元気と笑顔を発信します。
- ウ 小学生以下の子どもたちは、町や自治会、育成会が行う行事等で楽しそうに参加したいものがあれば、保護者や祖父母を誘って参加します。
- エ 自宅の中や携帯型ゲームなどの人とのふれあいが少ない遊びばかりにならないよう、多くの人に参加できる外での遊びや育成会などの行事に進んで参加し、人とのかかわりをおして豊かな心を育みます。

(2)「食」の魅力を活用して人と人とを結びます。

[行政]

- ア 育成会や自治会の催しに、多くの子どもや大人が楽しく参加し、ふれあいの場がもてるよう、模擬店の出店を提案します。(親子による店の運営や、中学生や青少年による運営)
- イ 家庭教育推進事業「子育て・親育ち講座」と連携して、子どもと大人と一緒に参加できる料理教室や、地域住民を講師に招き、未来の親となる中学生や高校生を対象とした料理講座を定期的に開催します。
- ウ 各家庭での食事の時間に、親子(家族)の会話を大切にしよう呼びかけます。

[地域の大人]

- ア 自治会や育成会の各種行事において、子どもと大人と一緒に食べ物を囲み団らんできるような機会(バーベキューや流しそうめんなど)を積極的に設けます。
- イ 地域の大人が地域の子どもたちを対象に、子どもたちが興味をもつような料理教室などを開催し、親子でふれあいながら調理と会食ができるような自主講座を開催します。
- ウ 食事の時は、家族での団らんを大切にします。

[次代を担う子どもたち]

- ア 中学生や青少年は、大人たちからアドバイスをもらいながら模擬店を運営するなど、お店に来た子どもや大人たちを真心込めてもてなす経験を積みます。
- イ 家庭教育関係の料理講座や地域で開催される料理教室に参加したら、各家庭で親子一緒にその料理をつくってみたり、家族のために自分でつくってみたりします。
- ウ 家族と食事をするときには、友だちと遊んだことや学校で楽しかったことなどを話し、家族と楽しく話ができるようにします。

(3) 子どもと大人が一番身近につながる自治会の機能を活用します。

[行政]

- ア 登下校中や放課後の子どもたちの安全を守るためには、身近な地域の方々のあたたかな眼差しが欠かせません。できる時に、できる範囲で安全見守りボランティア（スクールガード）として子どもたちの安全を見守っていただけるよう、呼びかけていきます。
- イ 地域住民が互いに「地縁」を築いていくためには、育成会、老人会、自治会が一体となり、世代をこえた人が集える機会を意図的に設けていくことの大切さについて、回覧板等を利用して啓発します。
- ウ 自治公民館や公園など、子どもも大人も気軽に集える場所を活用した事例を紹介し、子どもや大人が自由に集える居場所を地域に整備するよう呼びかけます。

[地域の大人]

- ア 子どもたちの登下校や遊びの様子を意識的に見守り、あいさつをしたり声をかけたりして、近所の子どもたちとのかかわりがもてるようにします。
- イ 自治会や育成会の会合で、役割や当番について話し合うだけでなく、子どもを巻き込んで行える行事にはなにがあるかなど子どものための話題を上げ、地域の大人全体で地域の子どもたちを育てていこうとする意識を多くの大人にもってもらえるようにします。
- ウ 自治会や育成会が行う活動や行事に中学生や青少年が参加できるよう、地域の大人が近くに住む中学生や青少年に声をかけて誘ったり、中学生や青少年向けの案内チラシを回覧板等で配付したりします。
- エ 自治会や老人会での活動の中に、地域の子どもたちが日頃がんばっていることを地域に発信できる機会を設け、地域の子どもたちのがんばりを地域の大人たちが認められるようにします。（例 論語の素読など）
- オ 地域の祭りや伝統行事に、子どもを誘って積極的に参加します。
- カ 長期休業中に自治会公民館等を利用して、地域の達人が先生となって様々な教室を開催します。

[次代を担う子どもたち]

- ア 登下校の時や外で遊んでいる時など、家の近くで大人の人に出会ったら、大きな声であいさつをします。
- イ 地域のお祭りや自治会の行事などに、進んで参加します。

提言2 大人がつながる心地よさを感じ取れる地域活動を推進します。

(1) 大人が「楽しい」と思えるような集まりを意図的に設けます。

[行政]

- ア 大人の遊び心を否定しない、流行のものを取り入れた楽しい講座を開催し、その中で人とのふれあいのあたたかさを感じてもらえるようにします。
- イ 大人たちの地域活動への参加状況を調査し、どのような内容の活動や行事なら自分からの意思で参加しようと思っているかを把握します。
- ウ 上記イの結果を受けて、行政が主体となって地域の大人が望んでいる活動や行事を開催したり、調査の結果を各自治会や育成会に知らせたりします。
- エ 地域の大人たちも、地域活動で充実した気持ちが味わえていることを広く知ってもらうために、中学生や青少年とともに活動した地域の方々の感想を随時広報紙やホームページで発信します。

[地域の大人]

- ア 公共の利益のために地域住民が分担しての活動だけでなく、「自分たち」が楽しめ、親睦を図れるような催しを意図的に取り入れます。
- イ 大人たちはどんなことを地域に望んでいるのかを把握するように努めます。
- ウ 地域の子どもが思いきりたのしめるようなお楽しみ会やお祭りを、中学生や青少年と連携して開催できるようにします。

(2) 孤独にさせないあたたかな地域を醸成します。

[行政]

- ア こども未来課が行う乳幼児検診や教育委員会が行う「子育て・親育ち講座」などで、参加した保護者が、日頃の悩みや困っていることを互いに語り合える機会を提供し、悩みや困り事を共有できるようにします。
- イ 自治会未加入で回覧板等が届かない世帯にも地域活動での中学生や青少年のがんばりが伝わるよう、町や教育委員会のホームページを活用し情報を発信します。
- ウ 高齢者と中学生や青少年がふれあえる機会を地域活動の中で設けられるよう、教育委員会と高齢福祉係と連携して取り組みます。

[地域の大人]

- ア 様々な機会に催される相談会や講座に進んで参加し、いろいろな人とゆるやかなつながりがもてるようにします。
- イ 自治会などで催しを行う場合、自治会に加入していない世帯や日頃の活動に協力的ではない世帯に対しても参加を呼びかけ、「つながる必要性を感じていない人」にも「つながる心地よさ」を感じてもらえるようにします。
- ウ 独居老人と頻繁に顔を合わせられるよう自治会で見守りチームを結成するとともに、何かの行事がある時には誘うようにします。

(3) 柔軟に自治会の機能を活用し、大人のつながりを創出します。

[行政]

- ア 行政協力員会議や青少年健全育成地域懇談会において、自治会長や地域の住民に対して、大人どうしのつながりの必要性や大切さについて伝えるようにします。

[地域の大人]

- ア これからも冠婚葬祭や向こう三軒両隣の付き合いを大切にする風土を各自治会で培っていきます。
- イ 小さな子から高齢者までが参加して、地域総ぐるみの防災訓練を行うことを通して、地域住民の安全を守るためには地域の大人たちがつながる必要性を実感してもらいます。
- ウ 下校後の子どもの居場所づくりのために自治会公民館を開放し、子どもたちを見守るための大人がそこに常駐することで、子どもを核とした大人の集いの場を設けます。

提言3 人と人がつながる地域活動になるため、町民活動支援センター（愛称：“みぶりん”）を活用します。

(1) “みぶりん”が、中学生や青少年による地域活動とそれにかかわる地域の大人たちの架け橋となります。

〔行政・“みぶりん”〕

- ア “みぶりん”を通じ、現在推進している中学生および青少年の活動趣旨や内容について登録団体に情報提供します（啓発リーフレットや報告書）。そして、登録団体の大人たちと中学生や青少年がともに活動できる機会が創出され、次代を担う人づくりの場が壬生町に広がるようコーディネートします。
- イ 世代をこえた町民の活動をあたたかく推進していくため、子どもたちが主体となって活動している多くの団体に“みぶりん”に登録してもらえるよう啓発します。

〔地域の大人〕

- ア “みぶりん”に登録している団体は、次代の壬生町を担う子どもたちを各活動の中で育てていきます。（例 幼・保・小・中・高での学習支援ボランティア、各団体が行う地域での行事への子どもたちの参加 など）
- イ 子どもが主体となって活動している団体や子ども会育成会などが“みぶりん”に登録して、世代をこえた多くの人がふれあえる場を生み出せるようにします。

〔次代を担う子どもたち〕

- ア 中学生や青少年は、誰かのために自分ができることには積極的に取り組み、学校ではできない豊かな体験活動をとおして生きる力を育みます。
- イ 地域とつながる豊かな活動の機会に積極的に参加し、世代をこえた人たちとの交流を楽しみます。

(2) 町民活動支援センターが、“わたしたちのみぶりん”になるようにします。

〔行政・“みぶりん”〕

- ア 町民が、いざという時に“みぶりん”を頼りにできるよう、“みぶりん”の機能やメリットについて町民に周知するため、広報紙や新聞、報告書等での広報活動に努めます。また、登録団体の活動内容をまとめた一覧表を町内全戸に配付するなど、どのような団体が町民のために活動しているかを多くの町民に知ってもらえるように情報を発信します。
- イ “みぶりん”は、地域住民（保育園、幼稚園、小中学校、高校、家庭、企業などを含む）が、どのような人を必要としているのか、どんなボランティアがあると助かると

思っているかなどの情報収集に努め、そのニーズに応えられる人や団体の登録を呼びかけます。

- ウ “みぶりん”が協働のまちづくりの推進拠点施設となり、住民どうしの連携や交流がいつそう深まるよう、ネットワークづくりの場としての機能を充実させます。

[地域の大人]

- ア それぞれの団体が行った活動について随時“みぶりん”に情報提供し、町民に対して活動の様子やねらいを伝えます。一つ一つが自分たちにとっては当たり前の活動であっても、他の団体や自治会、住民一人一人にとっては、学びたいモデルとなり得ます。
- イ 自治会や子ども会・育成会での活動、各学校での教育活動で支援があると助かるようなことがあれば積極的に“みぶりん”に問い合せてみます。また、誰かのために役立ちたいと思っている人や専門的な技能や知識をおもちの方に、“みぶりん”に登録していただきます。
- ウ 次代を担う子どもたちのため、“みぶりん”を巻き込んだふれあい活動を推進していきます。

4 おわりに

平成26年度は、のべ400人を超える中学生と青少年が様々な地域活動に参加しました。そして、中学生や青少年たちは、地域活動の中で多様な世代の人たちとかかわりあい、あたたかな言葉をかけてもらいながら、人の役に立つことができた嬉しさやみんなと力を合わせてやり遂げた達成感などを味わったことが、寄せられた感想から分かります。このような気持ちを味わうことができたのは、ともに活動した大人たちが、中学生や青少年たちを、次代の壬生町を担う若きパートナーとしてあたたかく迎え入れてくれたからです。中学生や青少年に活動の機会をご提供くださった皆様、中学生や青少年と主に活動してくださった皆様に感謝申し上げます。

カルタとり大会にボランティアとして参加した高校生から

「参加してくれた子どもたちの多さ。地域のつながりのすごさを感じた。また、大会を運営している大人の方々にも驚いた。得点計算や時間配分など忙しく動いているのを見て、一つのイベントを成功させるのに、人々の協力や連携がとても大切なのを改めて実感した。」

中学生とともに活動した地域の大人の方から

「積極的に働いてくれ、未来に期待がもてます。今後も共存していけましたら心強く、今後も楽しいふれあいの場が多くもてることを心より期待しています。」

上記の感想から、地域活動に参加した中学生や青少年も、ともに活動した多くの大人たちも、世代を超えた人々とのふれあいの心地よさを感じ、人と人がつながる大切さを実感することができていることが分かります。今後は、中学生および青少年による地域活動が、人と人とのつながりの場、人のぬくもりを感じ取れる機会となるよう、今回提言させていただいたことを壬生町民に広めていきたいと思えます。

結びに、この提言書を策定するにあたり、貴重なご意見やご提案をいただきました皆様に厚く御礼申し上げます。

平成27年3月

社会教育委員の会議 議長 田中鍾八郎

5 壬生町社会教育委員の会議名簿（平成25, 26年度）

委嘱期間 平成25年4月1日～平成27年3月31日

No.	役職	氏名	所属団体, 役職名	備考
1	議長	田中鍾八郎	社会教育関係団体 (文化協会長)	
2	副議長	小島 佳苗	社会教育関係団体 (子ども会育成会連絡協議会)	
3	委員	秋山 静男	学校教育 (壬生高等学校長)	H26～
4	委員	山崎 秀男	学校教育 (中学校長代表・壬生中学校長)	
5	委員	坂本 信子	学校教育 (小学校長代表・藤井小学校長)	
6	委員	篠原 孝生	社会教育関係団体 (PTA連合会・羽生田小学校PTA会長)	H26～
7	委員	鯉沼 玲子	社会教育関係団体 (人権擁護委員, 農村生活研究グループ協議会)	
8	委員	高田美代子	家庭教育 (家庭教育支援チーム)	
9	委員	若林 享子	家庭教育 (メリーランド保育園長)	
10	委員	田村 正敏	学識経験者 (議員, 教育民生常任委員長)	H26～
11	委員	島田 繁雄	学識経験者 (前那須青峰高校長, 那須塩原市社会教育委員, 元町子連サポーター)	
12	委員	千種 雄一	学識経験者 (睦地区コミュニティ推進協議会事務局員, 獨協医科大学教授)	
13	委員	笠井美恵子	学識経験者 (放課後学習支援スタッフ)	
14	委員	外山 幸江	学識経験者 (公民館利用者, 公民館まつり実行委員長)	
15	委員	松山美由紀	学識経験者 (公民館利用者)	

平成 27 年 3 月

壬生町社会教育委員の会議

事務局 壬生町教育委員会事務局生涯学習課社会教育係
Tel 0282-81-1873 / Fax 0282-82-0935
E-mail : gakusyu@town.mibu.tochigi.jp
